

<ニック・クドリー教授講演会>
データ・コロニアリズムとしての社会秩序の出現
——なぜ批判的社会理論が依然として重要なのか——

講演者：ニック・クドリー（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカルサイエンス教授）

日時：2019年4月16日（火）14時45分～16時15分（開場14時15分）

場所：慶應義塾大学三田キャンパス 東館6階G-Lab

〔三田キャンパスへのアクセスは以下のサイトをご覧ください。キャンパスマップ【3】が東館です。〕

<https://www.keio.ac.jp/ja/maps/mita.html> 〕

使用言語：英語

定員：80名（当日先着順・申し込み不要・参加無料）

主催：慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート「リスク社会とメディア」プロジェクト

お問合せ先：arisawa_kgri@yahoo.co.jp

この講演で、クドリー教授は社会秩序をめぐる問題を論じる。社会秩序をめぐる問題は、以前の著作（『メディア・社会・世界』および *The Mediated Construction of Reality*）と今年出版される *The Costs of Connection* とを結びつけるテーマである。ノルベルト・エリアスの研究に依拠しつつ、クドリー教授は社会的世界の今日の変容にアプローチするうえで、社会秩序の概念が最も有用であることを説明する。

だが、秩序を考える際に、社会理論は人間に関する、そして倫理に関する視座も兼ね備えなければならない。日常生活にとって社会秩序の変化がどのような帰結をもたらしているのかを考えるうえで、この視座は重要である。こうした議論を出発点に、次にビッグデータをめぐって今日生じている事態に関する分析が展開される。ここでは新たな著作で論じられることになる次のようなテーゼが示される。

すなわち、我々はデータ・コロニアリズムの新たな段階へと入りつつあり、それは今までとは完全に異なる社会的、経済的秩序を可能にする。この秩序では、データの処理が新しい経済的価値を持つとする資本主義システムによる、人間生活のデータ抽出と搾取が行われるのである。講演の後半部では、データ・コロニアリズムという社会秩序をめぐる一連の議論とポストコロニアル理論、およびマルクスの社会理論との結びつきが語られる。データ・コロニアリズムという新たな社会秩序から恩恵を受けるのは果たして誰なのだろうか。

講演者紹介

ニック・クドリー氏はメディア社会学者であり、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカルサイエンス（LSE）のメディア・コミュニケーションおよび社会理論の教授である。また、2018年から2019年にかけて、ハーバード大学バークマン・センター准教員、MIT訪問教授を務めている。クドリー氏の著書や編著は13冊におよび、2018年に慶應義塾大学出版会より出版された翻訳『メディア・社会・世界 —デジタルメディアと社会理論』（原著2012年）のほか、近著に *The Mediated Construction of Reality*（アンドレアス・ハップとの共著、Polity、2016）、*Why Voice Matters: Culture and Politics After Neoliberalism*（Sage 2010）などがある。Ulises Mejias との共著 *The Costs of Connection: How Data is Colonizing Human Life and Appropriating Life for Capitalism*（Stanford UP）は2019年8月に出版予定である。

